果心居士

とし や

一

果心居士の名に初めて接したのは、不思議にも日本文の記録ではなかつた。それはラフカディオ・ヘルン（小泉八雲）の『日本雜錄』(A JAPANESE MISCELLANY) の中に The story of Kashin Koji とあるもので、果心の文字は後になつて知つたやうなわけであつた。まだ高校生の頃で、ヘルンの著作を漁り讀んでゐたが、夾竹桃の花の枝を薄綠の地色に、浮出しにした圖案の美しい表紙を、嬉んだそのかみの日が偲ばれる。今では日本語譯があるが、中學の上級なら譯書を要しない程度の、解り易い文章であつた。話の筋は蛇足とは考へるけれど、物の順序として簡敍する。

二

天正の頃、京に果心居士と云ふ老人がゐた。祇園の境内の樹に地獄變相の繪を掛けて群集に因果の理を解いてゐた。その繪が眞に迫り、囚人の叫喚さへ畫面微かに聞える程の出來榮なので、その旨を荒川某と云ふ武士が主君の織田信長の耳に入れたのであつた。信長は、興味を嗾られ、早速に果心を召し寄せてその繪を展觀したが、欲くなつたので讓與を迫つた。果心は生活の種だから讓り難いけれど、強ひてとあらば百金頂戴したいと答へた。信長はその高價に不快の念を抱いたが、荒川が何か耳打したので、僅かの謝禮を渡して歸らしめた。歸途を追つて荒川は果心を斬り、畫幅を奪つて、信長に獻したが、展げて見ると繪は消えてたゞの白紙であつた。荒川は主君を欺いた罪で閉門となつた。人の噂によると果心は相かはらず北野の社や清水堂などで、說敎してゐると云ふ。荒川はそれを聞いて、度々出かけて行つたが果心の姿は

そこに見られなかつた。ある日、居酒屋で飲んでゐる果心を認め、直ちに捕へようとしたが、果心は少し待てとて、悠々と幾度か大杯を傾けた後、縛に就いた。奉行所での取調は、むしろ荒川が本當の地獄繪を懸着して、白紙のを主君に見せたらうとの嫌疑を深めて、却つて荒川が詰問された。牢にゐた果心は、荒川が責苦に會つてゐると聞いて、荒川は單に阿諛の徒にすぎない、一切を說明しようと訴へ出た。果心は云ふ、――繪にも魂がある。雀や馬が繪から拔け出した話はよく知られてゐる。私の場合は信長公が正しい所有者でなかつたから繪が消えたので、百金を惜まれないなら、原通りになりませう。信長はその言葉のやうにすると地獄繪は再び現はれたが、そこには先きの精彩は見られなかつた。その點に就て果心はかう答へた。初めは價値が附けてなかつたが、百金と限定されると、それだけの繪でしかあり得ないからだ。――

荒川に弟があつた。この男は果心を怨み、酒屋に立寄つた彼を見かけ、急に襲つて首を刎ね、百金を奪返して歸つた。兄を喜ばせて、さて包を解くと首は德利であり金は土塊であつた。その後、信長の邸前に高鼾で眠る果心が見られたが、縛めて牢に投じたら、十日ばかり眠り續けてゐた。

信長の死後、光秀は果心の事を聞き、禮を厚うして招じた。さうして、したたかに酒盃を重ね、御禮心に少しばかり會得した技をお目にかけませうとて、そこに立つ屏風を指した。近江八景の繪が描かれ、湖心には一寸大の小舟が浮んでゐた。果心がその舟を磨くと舟はだん〳〵艫聲と共に近づき、水は屏風から溢れ出して部屋に滿ち並居る人々の帶にまで達した。驚く中に舟は果心の前に留つた。彼はひらりと飛乘つた。さうして舟の退くにつれて水は漸く收まつた。部屋には濡れた痕もない。しかも果心の舟は見る〳〵遠くなつて、はては沖の一點となつて遂に消えた。果心は再び日本に現はれなかつた。

三

畫裡に現實の人間が出入すると云ふ說話形態は、支那小說には類例の多いものであるが、かく、一葉の扁舟に

身を托して遠く湖上雲烟の間に隱れ去るの幻想は詩興津々たるものとして享け入れられると思ふ。

大正三年刊行にかゝる田部隆次氏著『小泉八雲』は、この「果心居士の話」が『夜窓鬼談』に所據するものである事を示してゐた。『夜窓鬼談』は明治二十七年七月版で石川鴻齋（三河豐橋の人、大正七年九月十三日歿、年八十六）の作で、上下二卷から成る漢文の怪談集である。「果心居士」はその下卷『東齊諧』に收めた四十二篇中の第五話に當る。八雲と鴻齋との筆致は英漢の文體の相異から比較は出來ないが、素材取扱の上で、八雲の靈腕を認めねばなるまい。かの陰慘な地獄變相の記述の如き、單に略敍にとゞめたあたりは八雲の性格を想見させるものさへある。唯、漢文の特色として鴻齋の簡勁に對して、八雲の冗漫なる個所も亦往々にして發見する。

奸計をもつてその繪を奪ひ取るべき機會を得ようとしたのであつた。その機會は來た。果心居士は郊外の山の方へ通ずる途に偶然さしかゝつたからであつた。彼が山の麓の或淋しい場所に達した時、彼は荒川に捕へられた。（田部氏譯文）

居士去、荒川追居士往、日將昏、漸遇山麓、時前後無人、捕居士……（鴻齋）

彼は從者の幾人かを集めて寺に急いだ。しかし彼がそこに達した時に、彼は果心居士が去つてしまつたと云はれた。（譯文）

率卒到于北野、到則渺矣（鴻齋）

又、八雲の筆致が簡敍に過ぎて、情景の原據に及ばざるものがある

荒川は大急ぎで清水へ行つた。しかしそこに着いた時群集は丁度散つた所であつた。（譯文）

或日居士在清水寺、設場誘俗、荒川喜、急從徒而到、往來紛雜憧々如織、而不見其所在、馳驅索搜、無相似者、悒鬱失望（鴻齋）

原典の方が荒川の血眼になつて搜し廻つた末、呆然としてゐる樣子が一層躍如としてゐる。けれどもこの說話に於ける畫龍點睛とも謂ふべき末段は

有展畫、近江八景、舟大寸餘、居士揚手招之、舟搖蕩

出屏、大及數尺、而坐中水溢、衆僉惶駭、褰袴偕立、俄然沒股、居士舟中、篙工湯槳、悠然而去、不知所之、

とあるに較べて、八雲の精彩ある寫實的筆致は、場面を躍動させた點に於て、遙かに鴻齋の叙述を擯んでゐる。

猶『夜窓鬼談』には一道士が西陣の醫者に仙藥を與へたが、術技に達する素質のないのを知つて見放した話を添へ、その道士は果心であつたと語つてゐるが、八雲はこの話を省略してゐる。

四

果心の幻術に關する話は、何れの書に見えるのが、最初であるか知らない。文祿五年暮春の頃の稿と云ふ愚軒と名のる人の『義殘後覺』(續史籍集覽收錄)は、その古きに屬するものであらう。原文は長きに失するから荒筋だけ記述すれば、說話は凡てで三つある。一日、果心が伏見の勸進能を見に行つた所、群衆が雜沓して坐席がないので、入口に立ちながら幻術で自分の顏を三尺程に伸し驚いた人々を外に誘ひ出しておいて、自分はそつと入場して素知らぬ顏をしてゐた話。廣島にゐた頃借金をしたが、その金主に京の烏羽で偶然出會つて談判されたが、立話中に變相して人違ひだと抗辯した所、金主もよく見ると、なるほど顏が違ふので、あわてゝ陳謝したと云ふ話。今一つは、戸田の出羽と云ふ兵法者と立合つて勝ち更にその弟子數人に圍まれたが、隱身術で相手を屈伏せしめた話。卽ちこれである。

『夜窓鬼談』所載の話に比べて、その素材は孰れも殺風景である。詐欺慵着の惡德的氣分が濃厚に浮き上つて情趣索漠と謂はねばならない。

五

次には寛文十年の『醍醐隨筆』(著者は中山忠義である。三柳と號し、土佐の人であるが、醫を以て美濃大垣藩戸田候に仕へ、後、京の醍醐に卜居した)の下卷に見える。

松永彈正久秀多門在城の時、果心居士とて幻術の者あり。閑暇の時は語り慰む。ある夜、彈正われ戰場に於て白刃を交ゆるに到りても終に、恐懼の心を動かすなし。汝試みに幻術を行ひて我を恐懼せしめよと云ふ。果心、さらば近習の人を遠ざけて寸刃をも持たまはず、

灯もけし給へなど云へば、各々立ち退きける。刀劍のたぐひおくべからずと戒め、火うち消して、彈正一人箕踞して居れり。果心つゐ立ちて廣緣を歩み前栽の方へ行くとぞ見えし。俄かに月暗く雨そぼふりて風さらに蕭颯たり、蓬窻の裡にして瀟湘に漂ひ荻火の下にして潯陽に徨ふらんも、かくやと思ふばかり、物悲しくもあぢきなし。氣弱く心細うして堪へがたくなむ。いかにして斯くなりぬるやと、はるかに外を見やりたるに廣緣にたゞずむ人あり、雲すきに見出しぬれば、細く痩せたる女の髮長く搖りさげたるが間近く歩みよりて彈正に向ひて坐せり。何人ぞと問へば大息ついで苦しげなる聲して、今夜はいとつれづれにやおはすらむ。人さへなくてと言ふを聞けば疑ふべくもあらぬ五年以前病死して、飽かぬ別れを悲しみぬる妻女なりけり。彈正堪へがたくすさまじければ、果心居士、やめやめと呼ばるに、件の女は忽ち居士が聲となりて、これに侍るなりと云ふを見れば果心なり。いかがしてこれ程まで人の心を惑はすらんと、彈正あきれてけり。

もとより雨も降らず月も晴れ渡りて臺らざりけり。この話の次に、『醍醐隨筆』は奈良元興寺の塔の九輪の上に腰かけて四方を展望した事を叙してゐる。

この松永彈正の話はかなり凄愴な氣分が漲つて、幻術としての核心を把捉してゐる。從つて果心の技能を闡明するには多大の効果あるものと謂つてよい。

六

これに就て思ひ出されるのは、元祿九年刊行の怪異小說『玉帚木』である。その卷三に「果心幻術」の一篇がある。その松永の亡妻出現の條を『醍醐隨筆』と比較するに、多少辭句の洗錬は認められるけれど、殆んどその詞章が同樣である。著者林義端（文會堂）は能文の士であるのに、何を苦しんでかこの剽竊に近い所業をしたのであらう。但、都の錦や江島其磧がのう〳〵と西鶴の文を使驅し、後の京傳が平氣で秋成の詞華を借用したやうに、戲作者一般ののんき極まる寬濶性の所產とならば、問題視するに及ぶまい。『玉帚木』には、初めに元興寺塔上の話、猿澤池で篠葉を魚と化した話、彼の幻術を侮つ

た者の齒を楊枝で撫でてがた〳〵にし、謝つたのでもとに返した話、座敷中を大水とし更に奥から大蛇を出現させた話等があつて、終りに松永の話が据ゑてある。

こゝで座敷中を水浸しにする話は『夜窓鬼談』の近江八景に示唆を與へたようであるが、大蛇を出して人々を驚駭させ溺沒させた惡謔と、湖上一葉の扁舟の詩趣とを較ぶれば同日に語る事はできない。たゞ、『玉帚木』に於ける果心の幻術には、前述以外の素材を採擇してので、この點は留意すべきであると思ふ。

七

更に寛延二年の『虛實雜談集』(恕翁著、江戸、須原屋版)を見ると、その卷三に「化身術の事」と題するものが果心に關する說話である。

昔、秀吉公の時くはしん居士といふもの幻術をする。或時何にても不思議のこと見んとありければ、白晝忽ち闇夜となる。おかしく思ひたまひしに女一人現れいろ〳〵と恨みかこつ。その故はそのかみ筑阿彌子にて藤吉郎と云ひし疋夫の時、ある女に契る。その女若くして死す、此事遂に人に語らずありしに、まさしく爰に來てその折から秀吉の云ひし事ども悉く言ふ。是を聞て、まなこにいろ〳〵の事現すはあるべし、わが胸中のことを悉く知りけるは曲事なり。化身をいましめて磔に行へとありて、既にそれと極まる。くはしん縛めを守る者に言ひけるは、我さま〴〵の術をすれども、未だ鼠になりたる事なし、少し繩をゆるべ給へといひけるに、ちとゆるべければ鼠になる。磔柱にあがりけるに鳶來りて攫みてゆく。大身のものも小身に變じては鳶鳥にとらるゝものにや、訝かしきことにあらずや……

この記述はいかにも稚拙で、報告程度の筆致である。ただ話の内容が秀吉の青年時代の艶話であるのと、終りに鼠となつた隱身術の失敗とが興味を惹くばかりである。

八

ここで念頭に浮ぶのは『南蠻寺興廢記』の一節である。それは市橋庄助、島田清庵と云ふ二人の醫者が幻術に長してゐたので秀吉に召された。「九月十七日の月幽かに照

りける時、風騒ぎ雨一通り降りすぎて庭上の草木の葉もきらめき、凄冷頃植込の木の間より怪しきもの現れ出でたり、白衣の女髪を亂しかけ、苦しげなる俤にて庭上にイみたり」、この女は木下藤吉郎時代の妾菊と云ふ者で、嘗て秀吉の意に悖り手討になつた女であつた。これを幻に現はし怨言を言はせたので、秀吉はこの幻術者二人を糺明した結果、南蠻寺殘黨とわかつたので粟田口で死罪に行つた。その日附を天正十六年九月十九日と記してゐる。

即ち、『雜談集』と同型の話であるが、記述にはやゝ潤色があり、しかも一段の現實性を加味して、幻術を吉利支丹的色彩あるものゝ如く匂はせてゐる。而して契りし女の亡靈出現と云ふ說話の骨子には『玉帚木』等に見える松永の妻の面影が映つて、彼此一脈相通ずるものがあると思ふ。

また前節の『雜談集』末段にある鼠に化ける話は寓話化した點にこの作品の好尙が見られるが、これと同型の話が天明二年刊の『臥遊奇談』(一夕散人著、京都菊屋版)の卷三「隱形奇術逃死囚」の中に兆然と云ふ幻術者の話として見えてゐる。こゝでは刑に臨んで吏に請ひ、一術を行はんとて鼠に化け隼にさらはれるが、鼠も隼も共に彼の幻術で、巧みに逃れ去つた事になつてゐる。

猶『興廢記』で、多くの名勝を障子の外に現出させる中に近江八景を見せる條があるが、これは『夜窓鬼談』の屛風繪との交渉を思はせる事を附記したい。

九

次に安永五年刊の『怪譚都草紙』(五冊、京、梅村判兵衛版)の卷一の第二話に「果心居士幻術をなす事」が見える。著者は靜觀房好話であり說話は旣に『義殘後覺』にあるものと同樣であるが、多少の改竄もあり、筆者が靜觀房好話(麻子田好阿――山本善五郎、京に生れ、江戸東兩國に住む。)であり、且、本書の名は小說年表にも見えないから煩を厭はず引用する。但、寛延三年『諸州奇事談』、その再摺寶曆十年『豐年珍話談』と內容が同一かとの懸念もあるが、その點は未調査である。或は『怪談御伽童』(安永元年)と關係があるのかも知れない。とにか

く上述の著作と同一書であつても、「怪譚都草紙」なる短篇小話集が別に存在し、新著らしい序文を掲載してゐることを明かにしておきたい。

果心居士幻術をなす事（怪譚都草紙）

世に幻術といふものありて愚人の眼をくらまし、刀を呑、火を踏、後に大山を現し、大河を前にあらはす類、俗にこれを魔法といふ。幻は尙書に眩なりと記し、說文に眩惑と注す、和訓にまぼろしといふは先師老和尙の云クまなこほろぼしの略訓ならんと、げにも人のまなこをくらましほろぼすしはざは、いとにくむべし、さるに依ておほやけより、かゝるたぐひあれば必ずしりぞけ給へり。爰に永祿年中、洛陽に果心居士といふもの有き。名譽の幻術者にて、一歲松永霜臺久秀をたぶにこまらせたりし事、先人書にあらはして世の人知る所なり。されば此果心居士、有時和州に遊びて南都の芝居に立寄、歌舞妓をば見物せんと思ひ、木戸口に立寄しに、折節春の中なれば我も〳〵と來り集、さらに這入べきやうもなかりけり。居士とつれ立しおのこ、果心が袖を引て、いざ歸りて、又明日來らんと云。居士がいはく、我はあす京都へ歸らんと思へば、是非とも今日見物すべし、待たまへ、今心やすく芝居へ入て足下も我もゆる〳〵遊ぶべしと、木戸に立て、內をさし覗を、木戸番の男、そこのき給へ、もはや大入にて居所もなし、明日にても來り給へと云ながら居士の顏を見れば、次第に堅にながくなる程に、あたりなる者共、大に驚き、果心を取卷、前後にさしつどひ、是は〳〵といふうちに、居士が面、三尺あまり成ければ、芝居の內より此ありさまを見付たる者、こはめづらしきものこそ來れと、狂言を見捨て、立出ける。皆々表をふりかへりて、このよしを見る程の人、我さきにと芝居を立て欠出ければ、さしもの見物、一人もなく、忽芝居は野原の如く成にけり。果心今は是までぞと思ひ、大勢の中へ押分て入よと見へしが、元の如く面を返じて常にかはらぬ居士がかたち、誰咎むべきやうもなければ、芝居へ入て舞臺近くゆう〳〵と座しぬ。かくて見物の郡集今の化物は何方へ行けん、扨々希有成

もの哉と、口々に云もて又芝居へ這入もあり、おそろしき物見て、心驚き胸うち騷ぎぬと、色青ざめて印籠の藥取出し、呑ながら宿へ歸る氣弱なる男もあるに、此紛れに巾着を目がけて、付まはす大膽ものあり、誠に千差萬別の世の中ぞかし。居士は思ひの儘に芝居見物して夕暮に旅宿へ歸れば、同じく芝居見物せし人々居士が仕業とはしらず、そこは先刻の異人を見給ひつらん、そも〳〵あれは何といふものにて侍るらんと問はれし。居士がおかしさ、たまられず、なる程我等も見候、あれこそ世人のたつとむ福祿壽の巢立にて候と答へければ、此おのこ打笑て過ぬ。その後居士は和州に久しく住居しけるが、春日の宮居ちかきあたりにて、京都に住し時の家主に行逢ぬ。此家主往還とも云はず、居士が袂をしかと取て久しく音信不通し給ひ、いにしへの思も忘給ひつらめ、それは兎も角も件の金子、返辨し給へと高聲にわめきければ、果心さあらぬ體にて是は思ひがけなき仰言哉、定て人違にておはしまさん、近ころ卒忽のふるまい哉と、麼事〳〵として取あ

はねば、家主大にせいて、十年が程、一所に住し人を見損じ侍らんや、彌不孚なる仁かなと、顏打まもれば、こはまさしく果心居士なりしが、忽面は變じて、しらぬ顏と成けるよ、實も此ごろ人のさたに居士は魔法をきなび得たりと聞しが、いかに秘術を得たればとて、かくまでにはあらじ、是は我人違へしつるならんと、ひかへし袂をはなちて、まつひらゆるさへたまへ、まさしくそれがしが金をかしたる人よと存じつるが、只今お面を能々見申に、一向其仁とは天地けんがく、扨々一世一代の麁相仕候、御免々々と云捨て、足ばやに逃去ぬ。其後果心居士は、諸國を遊歷せしが、其終所を知ず。

十

かう見て來ると、果心の幻術に關する說話は局限された範圍內にあるやうである。一つの素材が、多くの作家の手にかゝつて樣相の變化を見せる事は、文藝上の常套的現象ではあるが、この說話はあまり原型から昂揚し昇華した形跡は認められない。果心なる人物の實在如何

はともかく、戰國期に於ける忍術・隱身術、また吉利支丹伴天連と呼ばれた妖術のくさ〴〵が「時代相」としての果心の話を生み出した事は首肯できると思ふ。

以上は果心の幻術に關する記錄を寓目した順序に書きつけたのにすぎない。『出定笑語』など花心と書いてゐるが、これは單に幻術者としての名を擧げただけである。

近世期の小語雜錄類には上述の外にも猶若干の文獻が存在してゐると思ふ。この點に就いては博雅の士の示敎を仰ぎたい。こゝには單に素材の羅列にとゞめて、讀本及び合卷機構上の一要素をなす幻術・妖術を示唆を思念したにすぎない。